（三）

◎宮島大八は東都に善隣書院を設けて子弟を薫陶し、專ら支那事情の研究に任じてゐる。亦た溫厚の君子人だ。

◎木野村政德、谷信近、平岩道知等は、關東都督府に、森茂は滿鐵に、速水一孔は間嶋副領事に各〻職を奉じてゐる。皆篤學で所謂通の通なるものだ。

◎青柳篤恒は早稻田大學に支那語を敎授し、且つ支那事情鼓吹の重鎭である。

◎西島良爾は大阪にありて、子弟に敎へ傍ら語學の著作をなし。田中慶太郎は書舗文求堂を設け、常に北京に往復して、珍書珍寶の掘出に力め。山田勝治は東亞同文書院の第一期を優等の成績にて出で、今や順天時報の主筆たり。岡幸七郎は漢口日報を主宰し、緒方二三、宗方小太郎、深水十八等は何れも熊本生で荒尾門下だが、十年一日の如く支那問題に熱注し、且つ支那事業に從事してゐる。此他白岩龍平の湖南、大東兩汽船會社に於ける、井上雅二の內地で官遊する、石本鎖太郎、川北純三郎、向野堅一、松倉善家、井出三郎（代議士）、山內巖、伊藤俊三等の各各實業經營に熱心なる等皆得易からざるの材だ。

◎此他昨年迄肅親王顧問と北京警務學堂の總敎習を兼ねし川嶋浪速がある。支那官情には最も精通してる筈だ。彼と相對するの人物には、支那稅關の要職に黑澤がある。而して兩者の部下には猶幾多の通連が控えてる譯だが、川嶋は其引揚と同時に部下も多分解散して了つたらう。

◎昨年來物故せるものに山根木菴、七里恭三郎がある。前者は人格高く其學殖文章は支那通の白眉で、後者は故立見大將の女婿で機才に富める企業家だつた。而して今や兩つながら之を喪へるは惜むべきの極だ。

◎先年東亞同文書院の上海に設立されてより、小支那通は年々數十名輩出し、大に我が對支那經營に資する所がある。其他久しく彼地に在留し、知らず〳〵學究以上の通人となれるもの幾何あるを知らず。一方には支那人で日本通なるもの、亦た少なからざれば、向後の行り樣に由つては、大に便宜が多からうと思はるゝ。

◎小川運平、西鐵次郎、市原源次郎、富尾章、上野一ノ宮、林、太田亦通仲間だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

十七　骨董品

骨董の珍重すべきは、實用には耐えないが、名匠苦心の痕を存して、千古の遺風の掬すべき處にある。而今朝野の幾老骨、果して骨董以上に珍重すべきもの幾人かある。

（一）

◎松方正義（大勳位、侯爵、樞密顧問官、日本赤十字社々長）は薩摩出身で天保老人だ。維新以來頻に功を樹て、二度迄首相として內閣を組織したが、財政は最も其得意とする所で、今の富豪中には彼の信徒も少くない。△彼は薩閥より出でゝ長閥に降り、山縣、井上に次ぐの元老たり。重要問題の起る毎に、當局者の相談を受くる身分だ。△子福者で二十名位もゐる相だが、蓄財も名人で、數百萬圓の長者株だ。△然れ共既に七十幾歲で、片足は棺桶中のものだから、先づ彼の生涯も千秋樂ちやテ。

◎岡部長職（貴族院議員子爵）元泉州岸和田の藩主で前司法大臣だ。手腕の見るべきものはないが、如何にも鷹揚で、自づから部下を服するの德がある。唯其玭瑕は亂醉すれば痴態狂狀を演じ、且つ拳骨を振廻すので、折角の殿樣振を臺なし

にして了ふ。左れども研究會では猶腐鯛位な値は存してゐる樣だ。

◎德大寺實則（前侍從長侯爵）は久しく先帝の左右に侍し、至誠一貫、其忠節を盡して臣子の儀表となつたものである。△今の首相西園寺及住友吉右衞門は、何れも其令弟である。而して彼れ方に功成り名遂げて、閑雲野鶴の伴侶となる、其襟懷亦た欣仰するに足るぢやないか。

◎千坂高雅（貴族院議員銀行會社重役）は米澤なる上杉藩士で、有名なる千坂兵部の末裔で、代々家老職を勤めたものだ。△彼れ壯時大久保利通及公伊藤の知遇を得て知事に累進し、次で野に下り實業界の人となつた。△天保生の老骨だが、元氣頗る旺盛で未だ若い妾の二三人位なくては眠れない程なれど、既に時代後れで話にならぬ。△彼の娘に有名な阿婆摺があつて、一時は大に浮名を流したが、其後如何になりしやを知らない、蓋し此娘は本能慾だけを傳統したものだらう。

◎青木周藏（樞密顧問官子爵）は曾て屢々公使として外國に駐劄し、又外相ともなつたが、傲慢で法螺の吹方は大隈伯以上なれども、何等の反響もない。△彼の在官中は失錯のみ多くして、一向其功を認めないが、其れでも聖代の功臣として、

優遊さるゝのは難有い譯さ。

（二）

◎土方久元（伯爵議定官）は高知藩士で、維新の際七卿に隨つて西下し、大に國事に盡くし、後進んで宮內大臣となり、其職にあること十年だつたが、其功を見ずして寧ろ醜聲の洩るゝを聞いた。なれども維新の活史料としては、亦一珍たるを失はない。

◎樺山資紀（海軍大將、伯爵、樞密顧問官）は現存せる薩摩元老の錚々たるもので、曾て陸軍にあり功を樹て、後薩閥海軍の氣勢を張るために、西鄕從道と共に、方角違の海軍に遷されて、大將となつたものだが、之は隨分世を馬鹿にしたものだ。△日清役の黃海戰に、有名なる西京丸の突進で大功を奏し、其後文部大臣となり、下院で藩閥萬能演說で大騷を惹起し、次で閑地に入つた。△彼は最も能く薩人の性格を發揮したるもので、粗豪勇猛の一方には理財の術に長じ、松方、山本等と相駢んで長者株の一人だ。

◎石黑忠悳（男爵、陸軍軍醫總監、貴族院議員）は越後出身で、醫を學んだが、刀圭を執つて病を

醫するのは拙で、其等の徒を驅使するの妙を得たる醫政家とも云ふべき質である。△彼の談を聞けば維新の業は己一箇で行てのけた樣に吹立てるが、自家廣告には巧なものだ。△而今茶に凝り、赤十字の世話などして居るが、マー隱居の道を能く心得たものだらう。

◎伊豆凡夫（陸軍少將）は福岡出身で、未だ年も若いが、先年新聞記者等を捉へて、餘り吹過ぎた祟で休職となつた男だ。有爲の材は重箱的の窮屈な陸軍に到底納り樣もなからうが、其然るを知らずして、無暗に駄法螺を吹き、隊務擧らずして禍を買つたのも馬鹿氣た話さ。

◎安藤太郎（同東京禁酒會長）は德川の幕臣で、榎本等と五稜廓で戰つた仲間だ。後領事や外務の局長などを勤めたが、今は農園を營み禁酒を奬勵してゐる。△昔は猩々式の呑だくれだつたが、布哇領事時代に、榎本より菰被の銘酒を贈られたのを竊に細君に樽を割つて酒を棄てられ、且つ手酷い苦言を喰つて蠕然として禁酒し、遂に禁酒會を組織して之を人に勸むる樣になつた。

（三）

◎柴山矢八（海軍大將）は薩人で元帥井上、伊藤に亞ぐの宿將で其識見手腕亦山本權兵衛に讓らざる男だが兩勇竝び立たず、何時も山本に防害せられ、日清日露の兩役共に出征に洩れ、吳や佐世保の鎭守府長官で他の功名を見せつけられたものだ。△此に於て彼は大に憤り、所謂艦隊派を提げて山本に當つたが、山本の老獪なる巧に元老株を籠絡し、且つ艦隊派の手足を挽取り、遂に全滅せしめて了つた。△彼を適所に用ゐずして悶々に終らしめたのは、人物經濟上の大損害だが、其罪科は山本に負はして宜い。

◎日高壯之亟（海軍大將）は日露戰役前常備艦隊司令官だつたが、開戰に先だち北邊に貶謫せられて、東郷の之に代りし爲め、憤慨措く能はず、山本駁擊に全力を用ゐしも、遂に彼の爲に排擠せられて、後備に葬られた。

◎松石安治（陸軍少將）は一時陸軍第一流の戰略家を以て許され、其作戰計劃の大膽にして奇拔なること、彼の右に出づるものはなかつた程だ。△天禀の鬼才は如何に長閥萬能でも、之を閑却する能はずして、彼は常に參謀本部の要職にゐた。△彼は士官學校も陸軍大學も優等の卒業生で、特に英、獨、露の軍隊事情に通じ、又支那の現狀をも能く研究してゐた。△一昨年滿洲視察中偶々瓦斯中毒で頭惱を壞し、久しく病床に横はりしが、亦た往日の彼ならず、遂に休職の止むなきに至つたのは、眞に惜いものだ。

◎東條英教（陸軍中將）は南部出身で、教導團を出でゝより漸次累進したものだが、其間常に刻苦勉學し、川上の參謀總長時代には大に重用せられ、彼の戰術及兵要地學に精通せることは、當時獨歩の評があつた。△性嚴正格謹で長閥の宿將等に容れられずして馘首されたものだが、今猶矻々として軍事の研究に從事してる樣だ。

◎西村精一（陸軍中將）は長閥の片割で、久しく砲兵工廠の提理だつたが、醜聞日々に高く、世上の非難を憚りて遂に斥けられたものだ。彼の富は小成金級に屬し、其所有地所等も少くないが、彼の此に至れるは全く寺内等庇護の恩惠で、人物としては醜劣極るものだ。

（四）

◎鮫島重雄（陸軍大將）は薩摩の丁稚小僧より身を起し、初め親兵として軍籍

に入り、爾來非常の苦學をなして身を立てたものだ。頭腦緻密で要塞戰は彼の長所である。△旅順攻擊には偉勳を奏し、戰後大將に進んで退職した。△巧に長閥に侯して、順調に其一代を渡つて來たものだが、人格は非議すべき點が頗る多い。

◎大島久直（陸軍大將、軍事參議官、子爵）　は元秋田藩士だ、神算鬼謀はないが、正直で勇猛である。故に日露戰爭には乃木軍に屬して、目凄しき戰功を建てた。△彼は夙に長閥に接近したお蔭で、敎育總監を休むると共に、參議院に老を養ふことゝなつたのである。

◎八尾新助（書籍商亡者）　は越前生で博文館の大橋と均しく北國ものだ。明治二十年頃明法堂の小僧となり、少しく其道の呼吸に熟し、先づ神田に古本屋を開き、次で法律書の出版が當つて、俄に規模を擴張し、幾個の店鋪印刷所等を設け、一時本屋成金として博文館と併稱された。△偶々錦町の大火に、其根據を焚かれ、敎科書で損耗を重ね、爾來急轉直下忽ち亦舊の木阿彌となつた。△要するに彼は機に乘ずるを知るも、其得失を鑑別するの明なく餘りに輕擧妄動に陷つた

からである。

◎巖本善治（元明治女學校長、明治殖民會社重役）　は基督主義で、曾て明治女學校及女學雜誌を經營し、最も進歩したる女子敎育家として聞えたものだ。△徒に理想のみ高くして、實行の技量之に副はず、學校も雜誌も久しからずして敗滅し、爾來流れ流れて移民屋となり、益々其牟楯の性格を發揮してゐる。

◎金子堅太郎（枢密顧問官、伯）　は筑前人で夙に米國に遊び法學を研究し、ハーバート大學の法學大博士號を有してゐる。△公伊藤幕下の四天王の隨一で、農商務大臣迄漕付けたが、餘り齷齪し過ぎるので、屬僚間でも世間でも頗る評判が惡かつた。△一言之を評すれば、小才の利く俗物と云ふ迄で、大局も見えねば度量もない。

（五）

◎鈴木久五郎（相場師士）　は武州糟壁の生で、曾て早稻田專門學校に學びしも中途で退き、長兄兵右衛門の鈴木銀行支店（日本橋小網町にあり）を支配し、傍株式相場に手を出した、而して其指南役は三浦逸平だ。△先づ日露戰爭の狂熱相

場で奇功を奏し、次で鐘紡株で突飛な捷利を博したが、當時彼の獲得せる額は五百萬或は一千萬と稱せられた△彼の全盛遊をなすや屢々萬金を懷にして其席に侍せる老雛妓に各々千圓束を投與して惜まなかつた。△然るに鐘紡株の下落と共に、彼亦た忽ち敗衂し、瞬時にして無一物の前生涯に歸つて了つた。△彼は猪突一式で旨く打當てたのだが、敗衂と共に多少の戒心を覺えたらしく、亦た往年の勇氣はない。

◎加東德三（相場師）　は日清戰爭の成金で、第一の鈴久と云つても宜い。其盛時は百三十二銀行及房總其他の鐵道を經營し、非常の勢であつたが、忽ち戰後經濟界の大波瀾に捲倒されて、脆くも地に塗れた。△今は日本橋阪本町に一小仲買店を出してるが、復た再擧快戰の見込もなさ相だ。株の戰爭は成功も疾いが、敗亡も亦た神速で、恰も兩國の花火を見る樣だ。

◎森本駿（前代議士）　は栗原亮一と相竝んで、政友會の財政通として、一時大に幅を利かしたものだが、兩者共に日糖事件で收賄の爲に服罪し、頃者ヤット人間並になつた樣だが、既に世も彼を忘れ、彼亦た再戰の勇も見えない。曾て酒量

大觀を著はし、酒德を頌したが、遂に酒に祟られて身を滅したのは、抑何の因果だろう。

◎伊藤己代治（子爵　樞密顧問官）　は公伊藤門下第一の才人で、一たび農相となつて退きし以來、內閣の交迭毎に其選に入らんとして入る能はず、空しく其醫劾の氣を相場と盆栽と妾宅通に洩してゐる。猶未だ政海に色氣はあるが、一たび勢を失すれば亦顧るものもない。彼の衷心も憐むべしである。

◎臼井哲夫（前代議士）　之も日糖の收賄で節を穢した一人だ。本年の選擧には恥を裏んで戰ひしも、選擧民は未だ彼の如くに腐敗せざりしと見へて、屑く彼を成佛さして了つた。然れども其糞度胸の据り工合は、或はご用黨の第一人かも知れないテ。

（六）

◎横井時雄（前同志社々長、前代議士）　は熊本の偉人横井小楠の息で、初め熱烈なる基督信者で、遂に牧師となり、同志社々長ともなつた。其頃の彼は先考を辱めざるものとして、大に尊敬された。△轟て東京日々の主筆となり、勅參となり、代議士とな

るや忽ち日糖事件で見苦しき最後を遂げた。△今は僅に筆の命毛を嚙絞つて口を糊してる樣だが、人間も外道に落つれば悲慘なものだ。

◎渡邊昇（貴族院議員男爵）　は大村藩士で、祿仕して會計檢査院長迄歷上つたものだ。剛情一天張の男だが、獨り擊劍は齋藤彌九郎の門に學んで、木戸孝允等と共に其奧妙を極め、今猶誇とする所で。擊劍大會などの時には、七十幾歲の老體を提げて、花々しき戰をやるが流石に修錬を積んだだけの値はある。

◎安倍井盤根（前代議士）　は福島縣の政客で。當年八十の老翁だ。第一議會より第四議會頃迄が彼の全盛時代で。民軍の猛將として屢々內閣不信任及對外硬を主張して議會解散を促し。殊に彼の發議で、議長星亨を除名して院外に放逐し、進んで政府を突擊せし時の武者振は、今猶眼中に彷彿として殘つてゐる。△然るに其後三四回の選擧に敗れ、其軀亦太く老耄して。今や往年の政敵たる政友會に兜を脫いて降り、其後塵を拜する迄になつた。扨も、人の行末程當にならぬものはない。

◎高野孟矩（前臺灣高等法院長、辯護士）　は臺灣の法院に在任中、司法行政の衝突を生じ、且つ時の內閣の命に抗したと云ふので非職となりしも、彼れ頑强に之を爭ひ、一時世の耳目を惑いた。△野に下ると共に辯護士となり代議士となりしも、旗色更に揚らず。前年詐欺事件か何かで醜聞を耳にしたが、其後消息を審にしない。蓋し奇俠の人の最後には、這麼な轍に陷るものが多い樣だテ。

（七）

◎宗重望（伯爵）　は對州の藩主で堂々たる門閥の出だが、一度德川大木の徒と連合して上院の政府軍に反抗し、盛に政治運動を始むるや、忽ち兵站に窮して或は投機に或は鑛山に奇利を射んとせしも悉く失敗し、今將た身を措くの處なき迄になつた。△彼れ星石と號し畫に巧なるも、之れ軈ては藝が身を助くるの不幸となるだらう。世間見ずの坊ッちやんが、餘り勢に乘ると大抵這な始末だ。

◎加藤平四郎（甲府市長）　は舊自由黨の名士で、國會開設運動より、初期議會の頃には、杉田、宮部の徒と共に驍名を轟かしたものだ。△後山梨、靜岡等の知事たりしも、治績の見るべきなく。又政友會に入つて黨務を執りしも、老いては駑馬

に如かず。遂に甲府の市長に葬られ、世は既に彼の存在だも忘れて了つた樣だ。

◎加納久宜（子爵　町長）は元千葉縣一宮一萬五千石の藩主で、維新以來久しく知事もやり、上院議員にもなつたが、老來其鄕人の懇請に任して町長となり、大に其氣風を刷新し、且つ自治の實を擧ぐるに力めてゐる。他の華冑の徒の多くは、帝都に傲然と構へて、肥馬輕裘に榮華を誇つてゐるに、彼の獨り草深き里閭に歸つて、鄕人の示導感化に隨ふは最も貴ぶべき事で。之を夫の徒に藩屏呼りをするものに比すれば、彼等は寧ろ蠱毒とも浮塵子とも謂つて宜しい。

◎榊增介（海軍大尉）　高柳某（陸軍少佐）は何も軍人の古物で、內地にあつては戮潰にしか過ぎない代ものだが兩者とも數年來滿洲に移住し、盛に奮鬪してゐる。△榊は鐵嶺で商業を營み、高柳は大連の在鄕軍人團長として、又同市の世話役として共に老の至るを忘れてゐる。想ふに我邦の海外發展には斯ういふ連中が、お先に繰出す樣でなくては、眞の發展は六つかしいよ。

◎管了法（前代議士、鹿兒島縣光永寺住職）は石州出の眞宗坊主だが、曾て慶應義塾に學び、又英國劍橋大學に遊びて當世の學を修め、歸朝後政論記者として政府の忌諱に

觸れ獄裡の人となつたことがある。△第一議會には議員の一に擧げられ、多少其名を馳せしが、次期の選擧に敗戰すると共に一轉して、復た僧籍に入り、本願寺の世話をなせるも、遂に其志を滿足せしむる能はず。今や退いて薩南の一寒寺にあり、靜に善男善女の敎化に從事して、大に其歸依する處となつてゐる。

◎野田豁通（陸軍主計總監　貴族院議員、男爵）は舊熊本藩士で、維新後陸軍經理部に出仕して陸軍監督總監迄累進し、日淸戰役には功もあつたが、大分醜聲を洩らした。退職後二三實業會社の重役として猶射利の巷に徘徊してゐる樣だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

人物評論

奇人正人

終

六載南溟水。鼇背釣巨鯨。十年朔北野。鐵蹄蹴長城。
薄霜染鬢髮。意氣猶疇日。風雲起滅頻。叱咤豈無術。
天夙待我儔。後樂與先憂。一劍知撥亂。文章托千秋。
而今扶桑去。煙霞連海度。遊子感何禁。天外飛一鷺。

（明治四十三年孟春去滿洲而歸航途上作……戸山銃聲）

大正元年十月八日印刷
大正元年十月十二日發行

定價壹圓八拾錢

著作者　戸山銃聲
發行人　東京府豐多摩郡戸塚村字諏訪六十二番地　小崎都也野
印刷人　東京市小石川區久堅町百八番地　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

不許複製

發行所　東京戸塚字諏訪六十二番地　振替貯金口座東京四九〇三番　活人社

○活人社出版圖書大賣捌店

東京神田　東京堂書店
同　神田　上田屋
同　神田　武藏屋
同　神田　勉强堂
同　神田　崇文館
同　神田　二松堂
同　神田　松山堂支店
同日本橋　至誠堂
同日本橋　北隆館
同日本橋　林平次郎
同日本橋　文林堂
同日本橋　榊原書店
同京橋　日黑書店
同京橋　前川書店
同本郷　東海堂
同　日本書店
同麻布　森江書店
同本郷　日東堂書店
同小石川　鷄聲堂

横濱市　第一有隣堂
同　第四有隣堂
同　勉强堂
同　弘文堂
同　弘集堂
神奈川町　第三有隣堂
大阪市　杉本書店
同　福音社
同　前川書店
京都市　若林書店
同　東枝律書房
神戸市　寶文館支店
名古屋市　寶文館支店
同　川瀨書店
同　小澤百架堂
岡山市　山陽書籍會社
廣島市　友田書店
同　積善館支店
久留米市　菊竹金文堂

熊本市　長崎書店
同　金書堂書店
鹿兒島市　谷村書店
福岡市　積善館支店
博多市　博文社
大分市　甲斐治平
長野市　西澤書店
松本市　水琴堂
長岡市　目黑書店
新潟市　萬松堂書店
金澤市　宇都宮書店
札幌區　富貴堂書店
小樽市　白鳥書店
秋田市　石川書店
弘前市　今泉書店
青森市　今泉支店
宇都宮市　內山集英堂
朝鮮京城　日韓書房
滿洲大連　大阪屋號

活人社發行書目

戶山銃聲先生主幹、活人社同人編輯

近日發刊豫告

（現代大家數名の願問あり）

現代人物專門雜誌

活人

毎月一回一日發行（但準備完成の上二回とす）

定價一部金拾二錢、郵稅金壹錢

活社會の事は走馬燈の廻轉し蟻の嚙合をなすが如く、起仆變幻極りなきものだが、此活劇の演出者は即ち活潑々地の活人である。

故に活社會の眞相を審にする相を知らむと欲せば、先づ活人の眞相を審にする事業家、政治家、商人、學者、坊主、教員、豪傑、山師、隱士の徒より婦人界の有象無象に限る。

我社は毫も他の勢力に藉らず黃金に眩せず、獨立獨行、努力奮鬪を以て活人研究に從事し。謂ゆる進んで婦人界の有象無象をも捉來りて、一々其面皮を剝き其の腹臟を剔抉し、眞の赤裸々として天下公衆の前てゐる中に露出せんとするのである。而今雜誌の數は百を以て數ふる程で、各々其趣を異にしき獨り本社の活人物專門を以てするのは、例えば一膳數種の珍味中に、松魚の鹽辛を添やらでゆる樣なものだ。讀者の御意に召すと召さぬは蓼喰ふ蟲の何と

む迄の事だ。本社は唯一直線に其志す所に猛進し斃れて後止

發行所　東京戶塚字諏訪六十二番地　振替貯金口座東京四九〇三番　活人社

現代朝野三百名家述、活人社編輯局編纂

青年修養十二訓

講述名士寫眞入
菊判約百二十頁洋裝美本
一冊定價貳拾五錢郵税金六錢
十二冊定價金（郵税共）參圓

第壹編　立志訓（十月發行）

講述名士

第二編　文章訓　◎乃木希典　◎富田鐵之助　◎頭山滿　◎杉浦重剛
第三編　讀書訓　第四編　語學訓
第五編　力行訓　◎大隈重信　◎浮田和民　◎高島嘉右衛門　◎千頭清臣
第六編　健康訓　第七編　錬膽訓
第八編　冒險訓　◎三浦梧樓　◎鎌田榮吉　◎大木遠吉　◎寺尾亨
第九編　武士道訓　第十編　職業訓
第十一編　致富訓　◎澁澤榮一　◎花井卓藏　◎中原鄧洲　◎大谷嘉兵衛
第十二編　成功訓　◎長谷場純孝　◎黑岩周六　◎池田謙三　◎島貫兵太夫

萬卷の書を讀み生涯を擧げて從事するも、猶一事を成し一業を逐ぐる能はざる者ある程に（社會は益々復雜となり、人事は愈々多艱となつて來た。此時に當り）多大の時間と勞力を費すを省きて處世の要訣を得るのが最も捷徑簡法である。

本社は此に視るあり政治、軍事、農、工、商、教育、宗教、文學、美術等の各方面を代表せる謂ゆる朝野の名士約三百名（に就き、）を叩き、親しく其の警欬に接し、其の蘊蓄を傾け、現代名士に就き、活教訓青年修養訓十二編を得た。其片言隻語と雖も、悉く千錬百磨の實際より出で來つたもので、之を服膺せば各々其志す所に隨つて、必ず十二分の功果を得ることを疑はない。依つて第一編より順次刊行して之を半歲の間に完了せしめ、以て青年諸君の嚴師を坐上に勸め、朝夕其金科玉條に親炙さるゝの便を計ることゝした。願はくば本書の盡きない内に御購讀ありて、一日も速に其修養に資せられたきものだ。

發行所　東京戸塚字諏訪六十二番地　振替貯金口座東京四九〇三番　活人社

活人社同人著

代表的現代婦人

菊判總クロース箱入美本
○紙數約四百ページ
定價金壹圓五十錢
郵稅拾貳錢

（近日發刊）

目次

◎獨立自營　◎學校商賣　◎虛榮の塊
◎藝術界の主義　◎玉輿の重石　◎尻の寡婦生涯
◎女大學式　◎自然の主義

本社は既に奇人正人を刊行して、現社會の表面的活動者たる有髯男兒を發表したが。猶其裏面の活動者とも云ふべき、**巾幗界の婦人**を紹介せざれば、表裏内外の相照を期し難ひ。依て茲に**現代婦人の各方面**を代表するに足るもの**數百名**を、一讀の下に明瞭ならしめんとするのである。得失を拉し來り、一々其長短を詮衡して。謂ゆる**裏面の消息**を、一讀の下に明瞭ならしめんとするのである。

苟も活動有爲の人は、男性と女性とを問はず、必ず本書を讀み。先づ**裏面の勢力**、**榮華**、**流行等の中心**となり又**如何なる人物**が、**如何なる行爲**が、**墮落**、**失敗**、**窮迫等の素因**となつてゐるかを研究するは、即ち其身を安全にし、且つ現代を知る唯一の捷徑であらう。請ふ近日發售さるべき本書の内容に之を視て其誣言ならざるを知られたいものだ。

發行所　東京戸塚字諏訪六十二番地
振替貯金口座東京四九〇三番　活人社

53

334
208

終